



小郷里のをんな

永代美知代

「もし、おきみが来ましたからね、何時でも御都合の日に連れにいらつしやいな」

斯う電話がかゝつて来ると、野枝子は譯も無く胸を躍らせて、そしてホットした。

「もう大丈夫！ 宅でもね郷里から下女が来ましたの、本當に私、やつとこれで安心しましたわ」

何時も取り次いで貰ひつけの三河屋の内儀さんに、電話の禮を云ふより先に、野枝子は斯う云つた。

「さうですかまあ！ お郷里からお女中さんをお呼びになつて！ 永い間女中さんちや御苦勞なさいましたつね

がね、でもよござんしたと、如何してもお郷里者に限りますよ、第一お坊ちやんのお爲にも大變お違ひてすからねえ」

斯う云ふ風に合槌を打たれると、野枝子は抑へ切れぬ満足を感じずには居られない、それに云はうやうもない誇らしさも手傳つた。

「單に同郷者と云ふばかりぢやない、おきみは徳藏の娘だもの、親代々切つても切れぬ恩顧の仲で、どんな辛抱でもして呉れる、もう、東京者の、渡り者の、すれつからしに氣を兼ねたり、馬鹿にされたり、そんな嫌な思ひは、一生しなくてもよくなつた」

野枝子は口に出して誇り度い程にも思つたが、内儀さんへはたゞ、何と云つてもお國者は正直で、辛抱が違ひますからねえ、とそればかりを繰り返して歸つた。

朝から雨がどしや降り降り降つて居て、何だか薄ら寒い嫌な天気の日だけれど、野枝子は如何しても、そのまゝ、家にじつとしては居られないやうな氣持になつた。

「坊や赤坂へ行きませうか、ねえ赤坂へ？」

ふと斯う云ふと、今まで静かに一人て遊んで居た兒が、耳早く聞きつけて、さかなくなつた。

「アカサ行く、アカサ行く、母ちやまと坊やとアカサ行く」

「だつてね、雨こんこが降つてるからよしませう、そしてお天氣になつてから明日行かう、ね、坊や、御覽なさい、あんなに雨こんこが降つてるぢやないの」

兒共を抱いて、無理と庭の方を向かせながら、野枝子は降りしきる雨を見入つた。

「嫌だ、赤坂行く、雨こんこ嫌だつてば」

「嫌だねえ全く、雨こんこは母ちやまも大嫌ひだ！」

「だから行く、アカサ行く、アカサ行く」

「仕方の無い人だこと、ぢや行きませう、だから一寸と待つてらつしやいな」

音無しくこのくりをして見せる兒を膝から下して、野枝子は思ひ切つて起つた。

髪をかき上げたり、着物を着代へたりする間も、野

枝子は良人の手前、強て外出の口實がないやうなのを氣にかけて、ともすれば止さうかともためらつた。だが又中野に住つた野枝子の兄の邸に來て居る筈のおきみは、一日も早く野枝子の方に必要なものと反對に、中野では不用の人なのに氣がつくと、野枝子は斯うした雨の日に、わざ／＼家を明け、兒共を連れて出掛ける事が、さまで大して不當な事でもないやうに思はれた。

「さうだ、お父様へ御挨拶を兼ねて行きませう」

野枝子は又一つ好い口實を見出した。口實と云ふよりも、むしろ野枝子自身の心に申譯の立つと思はれる程の事である、それは遠い郷里から出て來て、久しく兄の邸に逗留つて居た野枝子の父が、この二三日うち歸郷する事になつてゐた、歸郷前には是非挨拶に出なければならぬ、そして餘り間際に行くよりは、雨をかして、今日にした方がよからうと云ふのであつた。

「坊やは好い兒、いゝ兒だから音無しく待つちしてらつしやいな」

しつかり無しにこんな事を云つて、兒共の機嫌を取りながら、野枝子は手早く家中の雨戸を閉めて廻つた。わざ／＼庭へ降り立つて、外からはめ外しするやうに出来て居る水口の戸を閉めるのに、掛着かへたばかりの晴衣の裾を濡らしたり、足元の悪いぬかるみ道を兒共を脊負つて、びつしより／＼車を雇ひに駆け歩いたり、野枝子はそんな事をするのも今日一日だと思ひ思ひした。そして車に乗つてから後も、確乎兒共を抱さしめて頬摺りをした。

「坊やい、ね、あしたつから坊やのねえやが来るんだよ」

「ねえや嫌、あたし母ちやま好いの、菊やは嫌だ」

「さう／＼菊やは嫌ね、けれども今度のねえやは菊やないの、ね坊や、坊やの好いねえやはさみつて云ふ名前なの」

「嫌だ／＼ねえやは嫌だ」

兒共は最後に使つた女中を嫌がつて、ねえやとさへ云へば直ぐもう、その名の菊やを思ひ出して泣く。

野枝子は良人と二人で始終云ひ合つた。強て置く氣が無いと云ふてもない、寧ろありさへしたらと思ふのだけれど、さて正直で、兒共が好きで、あんまり年のいかないのをと云ふ、野枝子の理想に叶つた女中はめつたにありさうにも思はれなかつた。

「いつそ郷里から一人呼んで見たら？」

「ついで此頃田舎から出て来て、唐物屋を開いて居る赤坂の伯母が、見兼ねて云ひ出した。

「東京へ出たいものは幾らもあるが、徳藏の娘のおさみを置いて見ちや如何だらう、みやも此方へ呼び寄せたい風だからね」

息子の新築祝ひを兼ねて、父と一緒に丁度上京中の母親からも、そんな風な事を云はれると、野枝子にも願つてもない事だと喜んだ。そして中野の邸に久しくつとめたみやと云ふおさみの姉から、郷里の方へ呼び寄せの手紙が送られた。

「まだおさみは来ないのかい？一體来るのか来ないのか、今度出會つたら、阿母様によく訊いて御覽」

「折角氣に入つてゐるらしい人へ傷をつけるやうですけれど、あれぢやどうも、坊やんが可哀さうですから——」

近所の内儀さん達二三人から、斯うした告口をされた事もある。野枝子は髪結の世話で使つたのだが、僅か一月程居た間に、随分飛んだ目に逢はされた。何ても以前神樂坂あたりの待合奉公をして居たとかで、何にも云はず、野枝子の方から綺麗にひまを呉れたその翌日、郷里の結城へ歸つて行く旅費を借り度いなんかと云つて、無心を吹き掛けた程のした／＼か者であつた。それ以來野枝子は女中と云ふものゝ難物なのに、つく／＼こりた。或る時はもう、いつそ置くまいとさへ決心した事もある。

「馬鹿な事を云つてないで、早く女中か小女をめつけたら可いだらう、不自由でいかん」

「たつて無いものは無いんですもの、仕方が無い」

「本氣で置く氣が無いからさ、桂庵へ頼んだら今日にもある筈だ」

おさみが来る事に定つてから、野枝子は二三日置いては又しても、待ち兼ねたやうな良人の言葉を聞くのが辛かつた。

「来るには来るんでせうけれど、田舎者は氣が長くつてねえ」

「困るね、兎に角来ないのなら他を頼む都合もあるからね」

探す間には根つから無かつた適當な候補者が、以前頼んで置いた人達を通して、續々申し込まれて來るのであつた。中にはおさみ以上に此方の要求點を備へたかと思はれる者さへあつた。

「まあま、おさみを待つて頂戴な、如何したつて氣心も知れてましてねえ、それに辛棒が違ひますもの」

野枝子はその度さう云つて良人をなだめた。何の彼のと焦々しては見るものゝ、勝彌も矢張り理想の下婢といつた氣持でおさみを待つた。

小石川の野枝子の家から中野へ行くには、如何しても市内電車と山の手と、二つ乗らねばならなかつた。

のざし見付て下りて、一つ木の伯母へも寄つて、そして又四谷仲町から乗り換へるのが、何時も野枝子の習慣であつた。野枝子は今日も又雨の中を濡れながら兎共を連れて、唐物屋の店へ入つて来た。番頭も小僧も、店賣のお客で忙がしかつた。

「サ、おんりなさい、すつくり濡れちやつて！」
突然二階へ上つて来た野枝子が、どかりと兎共を下した。夜來の雨で中野へも歸れず、泊り込んで居る筈の母親一人と思ひ込んでゐた隣座敷に、思ひ掛けも無い父の聲がした。

「あや、野枝さん、丁度よかつた、父様も歩いてとる」

お茶器を運んで階子段を登つた伯母は、野枝子を促して座敷へ連れだ。

「これから中野の方へ伺ふつもりで居ましたの」

「甚い雨だによくまあ兒連れてのう、おさみをつれて来ましたぞ」

「二日も早い方がよからうつて、今朝父様がわざ／＼

お連れになつて下すつたのですよ」

「まあ、どうも！」

野枝子の眼には感謝の色がみなぎつた。

「おさみは如何してますの？」

ふと氣になつて野枝子が訊いた。

「お千代さんがあなたの家へ連れて行つたが、行違になつたらしい」

間も無くお千代の聲で三河屋から電話がかゝつて来た。それが今一度此方へ連れ戻させて野枝子は、兎に角兩親と一緒に中野へ行く事にした。郷里から出立のおさみが、今一度姉に逢ひたからうと思つたが、兎に共風邪を引かせてはと云ふので、その守に赤阪へ残して置いた。

「寶丹を買つて来たかい？」

電車から降りて邸までの途中、斯う父親から聲を掛けられて、車上の母も野枝子も振り向いた。

「何處かお悪いので？買へつて仰有つてましたのでしたかしら？」

「サニ、さうぢやないが、野枝子が吃驚して氣を失ふといけんから、ハッハッハ」
父親が誇るだけあつて、中野の家は美しかつた。

「思つたよりよござんすのね」
野枝子は嬉しげに日本館から西洋館へ、まだ木の香の新らしい、真白な二間半幅の長廊下を踏んで、彼方此方見廻つた。

その日は丁度良人のかへりの遅い夜で、野枝子は留められるまゝに、強て振り切つて歸宅を急がうともしなかつた。だが折々兎共の事を言ひ出した。
「大丈夫もう寝てますよ、若し泣いたらおさみが機嫌を取るでせう、それに伯母様も被在る、お千代さんもゐる、そんなに心配しないでよろしいよ」母親は斯う云つて「おさみは初奉公ぢやないから、空切りの丸出を使ふやうぢやない、幾らか樂だらうと思ひます、評判の支村に居たんだから、奉公の辛い事はよく解つても居ようし、結局好いかと思ふ」

「支村に居ましたの？」

「かめ子さん夫婦について、岡山で二年も兎共のをしてゐたのだが、十五と云ふ年の割合には何彼をくする相で、かめ子さんはもうすつくり兎共をまかす切りになつてたよ」
野枝子は同じやうに兒持になつた幼友達の事を思ひながら。

「ぢや兎共は嫌ひぢやないのねえ」
「嫌ひぢやなからう、七八つの頃から兎共を背にくりつけられてるんだもの、でも、義務教育だけは受けてるから、うまく仕込めば好い女中になるでせうよ」

「それに徳藏の娘ですものね」
野枝子は遠い故郷の門長屋に住つた徳藏一家を思ひ出す。殆んど馬鹿正直と云つても好い程人好で、酒好きな徳藏は、年中野枝子の實家に入つて、盆だ彼だ、さうした時の墓掃除は定つて徳藏の役であつた。

「オイ俺アあんな立派な婚禮ちやうものを見た事が無い、御縁女さんのお土産に三石つ米を豆煮にして村に撒き歩くと、十五里四方の者共が貰ひに來やがつての

う、その晩勢れたらう云てからに、先方様からうんと御酒下されて、おまげに御祝儀が如何ぢやい、供の者一人くへ、手の切れさうな十兩の札を一枚つぢやい」

酒が廻つて来ると、定つてそれを云ひ出した。最う二昔も三昔も前の、野枝子には伯母に當る人の婚禮に付き添ふた當時の自慢話なのである。ぐびり、ぐびりと獨酌でやりながら、黒光に光つた臺所の廣い板場に据ゑられた膳に向つた徳藏は、女中頭のさめやを相手に、何時までもく同じ事ばかりを繰り返す。さよろりと光つた眼の丸つこい、眞赫な顔を覗いた幼い野枝子は、大黒様のやうな爺やだとも、思ひくした。

「小石川の奥様、どうぞあの通り何も知らん者で御座いますから、うんとお小言を仰有つてお仕込み下さいませやうに、何分にもお願ひ申します」

野枝子が歸りかゝると、みややは暗い廊下にしゃがんでみて、そつと野枝子の前に手をついた。

「何分坊やが我無遮羅さんだからねえ、おさみにも氣の毒なのよ」

「いいえもう！」

四谷で降りて仲町の改札所の時計を見ると、十時と過ぎてゐた。野枝子は急に見共の上が氣になり出した。何と云つてもまだ来たばかりの者へ任せ切つて、餘りと云へば呑氣であつた――。

「伯母様も困つてらつしやりやしないかしら？」

野枝子は眼と鼻の間の見附まで電車に乗つて、轉ぶやうに一つ木の通を走つた。運よく雨は止んでゐて、脚の早い黒雲の間に、廿日ばかりの月が顔を出した。

「些少も泣きやせなんだぞい、お千代が抱く私が負う喧嘩のやうに二人が取り合ふて、終ひに私に抱かれて寝ましたけん」

「まあね、どうも！」云ふ間も野枝子は氣にして時計を見た「早く歸らないと、最う間も無く良人て歸るてせうから――あのおさみは如何してまして？」

「坊やを私達で見たもんぢやけん、夕飯の後じまひも手傳つたり、明日のお米をといだりして貰ひましたの、眠からうと思ふて、二階で坊やの番をさせな

ら、居眠でもしとれいつて、さう云つてやりました」

「有り難うよ伯母さん、そいぢや私歸りますわ」

お千代が呼ぶと、おさみは眠さうな眼をして下りて来た。

「奥様、お歸んなさいませう」

二十歳越した女の着さうな細い縞緞の入つた、ふとろくの思ひ切つて袖の短い袷の上に、七八つの子供帯とも見える幅のせまい紅入りモスの帯をチヨキンと結んで、前髪もとらぬ頭髪をお婆さんのやうにぐるぐる巻にして、ついと顔ばかり持上げて云ふお郷里訛を、野枝子はなつかしいものに聞かされた。

「坊やは私が負ふから、お前は荷物を持つてお行きなさい、行李なの？」

「ハイ、小さい袋が一つあるんですが、今日で無うてもよう御座りやんす」

「否ね、今日は雨で道も悪いし、どうせ終點から車で行くから持つてお歸りよ」

「はい」

おさみはぐぢりぐ向ためらつた。

「暇を見て取りに来る積りて居るんぢやろ、でものおさみ、却々道が遠いけん、車で行くんなら今日にた方が便利がよからう」

伯母は傍から注意した。

「はい」

旅行用の信玄袋の可成り大きな形を持つて、おさみは格別苦にもならぬらしく野枝子に従いて歩いた。

「持てるかい電車まで？」

「はいもう馴れとりますすけ」

莞爾笑つた顔が、徳藏をつくりだと思はれた。

今朝閉め切つて行つた茶の間の雨戸を木戸から廻つて開けて、野枝子は部屋々々の電燈をひねつて廻つた

「随分亂雑で驚ろいたらう！」

「はい、いゝえ」

とは云つたが、座敷の中にもちやは散かつてる今朝出掛けに置かれた儘らしい机の上の鏡だの、白の瓶だの、濡れ手拭だの、さうした物を見たおさみ

眼は異様に光つた。

「阿母様やみやから聞いてもいってだらうがね、私は些少普通の奥様方と違ふんだからね、これからはお前が何でも家の掃除を引受けて、坊やのお守をよくしてね、私に何彼を書かして呉れなね」

「は？」

「お前も腹が空いてない？」

「否、赤坂でも夕飯を頂戴しましたから」

「でも遠慮して澤山頂かなかつたんぢやないの？何か食べたら如何？」

「私は何ですが、あの奥様、焼米うあがりになつては如何ですか、お實家のさめ姉からあなたにあげて呉れえつて、私がことづかつて来とりますか」

「さう、それは嬉れしいわね、お茶を熱くして、お前も彼方であがりな」

野枝子は久し振りに新穂の香をかいで、又しても故郷の秋を懐しんだ。

「何ても歸りが遅いんだらう、お前はお寝みよ、まだ

旅疲れもあるんだもの」

「否、まだ眠りは御座りやんせんけ」

さう云ふのを無理にねかして、一時間ばかり経つた十二時過ぎに、勝彌が歸つた。

「今日ね、おきみが来ましたよ、迎へに行つて連れて来ましたの」

「赤坂へかい、中野へかい？」

「赤坂まで父様が連れて来て下さつたの」

「父様が？ちや中野へ泊つたのね？何て又母様もが利かないんだらう、あんな立派な家を初めに見せて此處へ来りや誰だつて變に思ふよ」

「だつておきみはみややの妹ですもの、同じ東京へ来て、逢はせない譯には行かないわ」

「だから先づ眞直ぐに此家へ連れて来て、少し東京の様子を解つてから逢はせれば好いぢやないか、屹度い家だと思つてゐるだらう」

勝彌は不興氣に云つた。

「そんな事があるもんですか、此家だつて何もそんなに恥かしがる程の家ぢやないわ」

野枝子は女子大學の國文科を卒へて、法科大學の生徒を養子に貰つた友達の支村かめ子が、東京で家

持つてゐたその頃の家と思ひ出した。

「あの娘の元ゐた支村つて家ね、あの人は郷里一番の金持なのですけれど、ついその原町時代の家を御覽なさい、十圓前後の、本當に安つぽい家でしたつて、兄さん夫婦は訪ねて行つて知つてゐるわ」

「ちやアまだ自家の方がましなんだね」

「さうですとも」

「だつてあの娘は知りやあしないぢやないか、それに如何したつて中野の家を見た眼に、僕の家なんか見られるもんぢやない」

「そりやアさうだわね」

野枝子は淋しい心になつた。そして今更のやうに四圍を見廻した。

貧弱な机と火鉢と本棚と——十七圓なにして勝彌の好みのまゝに造らせた引出澤山の薬種屋にてもありさうな書棚が一つ、僅かに異彩を放つて見えた。

「せめて道具でもあるとねえ」

勝彌もしんみりした調子で云つて。

「これから一つづつても買つて来ようね」

「えい、だけでも駄目ね私達は！」

「如何して駄目だ？買はないから買へないので、僕等

位の収入なら買つて買へないつて法はないでせう！

「だつて、駄目ですわ、所詮私達ぢや駄目ですわ」

「今月の収入は幾らです？何時だつてそんなにブーぢやない筈だ」

野枝子は百八十圓と云ふその月の収入を心で思つた、百四十圓、百五十圓、如何したつてその位を下つた事はない、夫婦に兒共一人の生活で、おまけに久しい間下婢無しに過しても来た。

「だけれども私達のやうに特別費を使つちや駄目」

「特別費つて何があるんだらう？母と××君で七十圓さねえー」

勝彌は指を折つた。

「だから食傷横丁をよさなくつちや、あなたも私のやうな者と結婚したのが悪いのよ」

「馬鹿な、まあ好いや、如何したつてお互に貧乏文士だ」

「好いからまあうんと書きたまへ、雑文をよして自信のあるものをねえ」

勝彌は引立てるやうに云つたが、野枝子はもう、今の先きモードを得たハッピーな氣持に歸る事が出来なくて、鉛のやうに重苦しい息を吐いた。——完——